

希望の世界へ ～国際相互理解と文化交流～

# 関西・大阪 文化力会議2015

2015年9月11日 ■ 堂島リバーフォーラム

主催：関西・大阪 21 世紀協会  
後援：外務省、大阪府、大阪市、関西経済連合会、大阪商工会議所、関西経済同友会  
協賛：サントリーホールディングス  
協力：堂島リバーフォーラム

## 開会にあたって

### 大阪から文化支援の広がりを

堀井良殷 (公財)関西・大阪 21 世紀協会 理事長

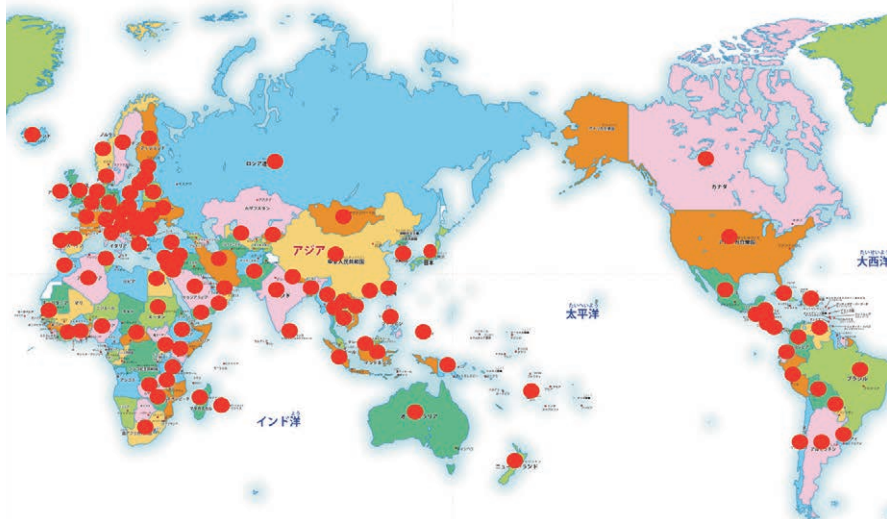
戦争の世紀であった20世紀が終わり21世紀を迎えたとき、人々は今度こそ平和な世紀であるように願いました。しかし、その願いもむなしく2001年9月11日に9.11(アメリカ同時多発テロ)事件が発生。そして今なお、世界は戦争やテロ、難民や貧困、環境破壊などに悩んでいます。

平和国家として戦後70年を歩んできた私たちは、こうした人類が直面する諸課題の解決に、どのように貢献できるのでしょうか。日本はこの70年間、国としても、個人のレベルでも平和のために多大な努力を尽くし、世界に貢献してきました。大阪においては、45年にわたって続けてきた「日本万国博覧会記念基金事業」も、そうした世界への貢献の一つです。

同事業は45年間で日本を含め109の国と地域の4,386件の活動に対し、189億円の助成を行ってきました。2014年から当協会が同事業を承継し、国際相互理解の促進と日本の伝統文化の伝承・振興をテーマに、今後も文化の力で日本を元気にし、世界平和に貢献すべく活動を続けていきたいと考えています。

今回の関西・大阪文化力会議では、今後の希望ある未来に

向けて私たちはどう考え、どのように行動すればよいのかを考えることと併せ、万博記念基金の助成対象となった団体の活動も紹介し、同事業の成果を広く社会に発信することを趣旨としています。ご参加いただいた方々には、本事業へのさらなるご理解をいただければ幸いです。



45年間に109の国と地域の活動を助成(日本万国博覧会記念基金[1971年設立])

# 地域の文化力で世界に貢献を

近藤 誠一氏 近藤文化・外交研究所代表(前文化庁長官)

## 機能不全となったリベラル・デモクラシー

終戦から70年が経ったとはいえ、世界は依然として戦争や貧困、環境破壊、金融危機などの問題が山積し、なかなか解決できていません。問題があまりに難しいために、人々はその解決策を考えあぐねているように思います。

ドイツの哲学者・ヘーゲルは、「ミネルバのフクロウは黄昏がやってくると飛び始める」と言いました。フクロウは知恵のシンボルですが、これは、文明が終わろうとする時にさまざまな知的な議論が起こり、それが新たな創造の契機になるという意味です。今まさに、私たちはそういう状況にあるのではないのでしょうか。

経済学者のリチャード・フロリダ(1957～)が「今、文明はグレートリセットの時期にある」と述べたように、今や世界の文明は過渡期の状況にあります。われわれ人類は民主主義を根幹とするリベラル・デモクラシー(自由民主主義)を導入したことで、平和と繁栄は恒久的に約束されていると思っていました。しかし、近年の相次ぐ金融危機や先進国の経済低迷、格差社会の拡大やテロなど、ヨーロッパの先進国をはじめ、世界中でその制度を支えてきた国家が十分にその機能を発揮できないまま、多くの問題に直面しています。

では、なぜリベラル・デモクラシーがうまく機能しなかったのか。そこには三つの問題があります。一つは、冷戦勝利によってリベラル・デモクラシーの体制が普遍的であると思い込み、それまでの世界をリードしてきた英米スタイルをそのまま多くの開発途上国に押し付けたこと。二つ目は、リベラル・デモクラシーを導入するにあたって、それがどういふものか、それを機能させるために必要なモラルとは何かといった根本的な教育をしなかったために、失敗や混乱を招いたこと。いわば免許証を持たず自動車を運転させるようなもので、「アラブの春」と呼ばれる民主化の騒乱はその一例でしょう。三つ目は、先進国が国内でリベラル・デモクラシーを乱用・悪用したために、格差拡大や金融危機などを生み、リベラル・デモクラシーへの信頼を損ねたことです。こうしたことからリベラル・デモクラシーそのものに対する反発や疑問さえ生じており、中国やロシアなどの反リベラル・デモクラシー勢力を勢いづかせたり、制度に幻滅した若者をイスラム国へと駆り立てているのが現状です。

## 日本人の伝統的精神や道徳を世界に

文明が発達する一方で、モラルや規律が低下し、経済格差や金融危機などが助長されています。その原因の一つには、リベラル・デモクラシーの名のもとで利己主義が広まり、人々の良心や道徳心が希薄になったことがあげられるでしょう。今や



リベラル・デモクラシーを正しく使いこなすためには、個人個人の良心やモラルといった善性を再構築する必要があります。

そのための方法として、私は、日本が長年大事に守ってきた伝統的な精神性に着目しています。例えば日本の作庭に見られるような人間は自然の一部だという「自然観」や、芥川龍之介が『蜘蛛の糸』で示したように、悪人でも一度は善行をしているものだという物事の黒白をはっきりさせない「あいまいさの受容」、水墨画の大きな余白に深淵な宇宙観を見出そうとしたり、「風」の表現に傾注した芸術作品など、「目に見えるものの価値」を重視する考え方です。私は、西洋の近代合理主義とは異なり、相手の心や文化を尊重し、あえて二元論を排する日本人特有の精神性を世界に広めることで、人々の心をより豊かにし、良心を目覚めさせ、近代文明をよりうまく使いこなすきっかけになると考えます。

## 力を発揮できるサイズは地方都市

では、この日本文化の良さを誰が、どうやって世界に広めていくのでしょうか。その答えは国ではなく地方にあります。国というのは、中国やアメリカでさえ、地球規模の環境やエネルギー、テロ対策などを一国では解決することができず、そうした問題を扱うには小さすぎる存在です。一方、個人の健康や福祉など毎日の関心にきめ細かく応えるには国体が大きすぎるし、動き



も遅い。そうした中途半端な規模であるため、時代の変化に俊敏に対応することができません。しかも国家は主権を背負っていることから、領土問題や国の面子の問題にこだわり、建前論を主張し続けなければなりません。

一方、個人のアイデンティティは生まれ育った都市や地域で培われる部分が大きく、自然や歴史、伝統など固有の文化的価値観も各地域に根付いています。地方都市は人々が固有性を持ちつつ連帯して力を発揮できるサイズであり、人々が自然に集まり、刺激し合い、創造性を育む理想的な場なのです。そうした意味で、今後は地方が一層重視されていくでしょう。

## 創造性を育むサードプレイス

これからの日本は地方の時代だといわれていますが、地方都市は今後の可能性を何に見出し、何に留意すべきなのでしょう。

まず、これからの地方都市は、創造的なアイデアが自由に出入りできるような開かれた場を作ることが大事です。かつて日本は、諸外国から「菊のカーテンがあって、なかなか入り込みにくい」といわれたように、海外との交流や情報交換が不得手なところがありました。この点はぜひ注意したいところです。そこで現代においては、多様な人材が世界から集まるクリエイティブセンターや、家でも職場でもない第3の場所「サードプレイス」が不可欠となります。

サードプレイスは、個人が自由に出入りでき、誰も接待役を引き受けずに済み、全員が居心地よく過ごせる場所です。いわば「もうひとつの我が家」のようなもので、そこに集まると自由に議論ができ、インスピレーションが湧き、ひいてはクリエイティブ・インダストリー（創造産業）の芽吹きも促されるという

ところ。私たちは2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、今、日本の各都市がそれぞれの特徴を活かして人々を集め、創造性を発揮するときにあると思います。そしてこれらが積み重なることで、大阪や京都、神戸といった各都市が、かつて世界中の知識人や商人、留学生などが集まった唐の都・長安のように、世界中から若者やクリエイティブな発想をもつ人々を惹きつけ、新たなビジネスを生む場となるのです。

## 地方の潜在力を活かせ

今、世界が直面している問題を解く鍵は、地方のあり方にあると考えます。すなわち、地域の歴史的価値を掘り出したり、伝統文化の継承者を見つけたり、それを発信したりするだけではなく、点と点を繋ぐようなクリエイティブな拠点をづくり、みんなが集まる魅力のある場を積極的につくっていくことです。地方都市が創造拠点になることで、国を大きくし、国民の心を充実させることにも繋がると思います。加えて、相手の思いや文化を尊重する心や二元論を排する日本人特有の精神性が示されることで、近代合理主義の欠点が補われ、日本がリベラル・デモクラシーをバランス良く使いこなす見本にもなるでしょう。地方都市にはそれを可能にする大きな潜在力があり、その実績を積み重ねることで、日本は世界に貢献ができるのではないかと思います。

### 近藤誠一氏

1946年神奈川県生まれ。1971年東京大学教養学部卒。1972年外務省入省。在米国大使館公使、国際貿易・経済担当大使、ユネスコ大使、デンマーク大使などを歴任。2010年より文化庁長官として三保の松原を含む富士山の世界遺産登録に尽力し、2013年退官。2014年より日本万国博覧会記念基金事業審査会審査委員。



## パネルディスカッション

# 世界に示す日本モデル

### 国分良成氏 防衛大学校長

#### 地域主権

東京一極集中が続くなか、現在はどのようにして地方を活性化するかという議論が盛んになってきています。近藤誠一さんの基調講演も、まさにそういう観点でのお話でした。そこで私の名前を思い出していただきたいと思います。すなわち「適度に『国』を『分』けると『良』く『成』る」ということです（笑）。何もかも中央（東京）に集中させるのではなく、地方のさまざまな良さを引き出すことで、ひいては日本全体を元気にし、日本の良さを世界に発信していくことができるということです。もちろん国防や外交をはじめ国家レベルの問題は、国

が責任を持って対処しますのでご安心ください。

私は防衛大学の校長として4年目に入りました。

国と人のために役立つ人々を育てることが防衛大学の役割ですが、私は、人のために働くには、他者の思いを想像できる感性を持たなければならないと思っています。そのためには知識を蓄え、感性を鍛えることが必要です。

さて、今日のこのシンポジウムでは、まず日本全体がどのようになれば良いのかということを考えたいうえで、「関西・大阪が元気になるにはどうすればいいか」について考えます。

## 戦後70年談話の評価

皆さんご承知の通り、安倍晋三首相の続投が決定しました(自民党総裁選は2015年9月8日に告示。安倍首相以外に立候補届出がなく、無投票再選により3期目の総裁就任となった)。2015年は「終戦70周年」が大きな話題となり、9月11日現在、集団的自衛権をはじめとする安保法制が議論されています。安倍首相の「戦後70年談話(8月14日)」に対してはさまざまな議論がありますが、例えば朝日新聞が行った世論調査(8月22～23日)では、それについて「評価する(40%)」が「評価しない(31%)」を上回ったという結果が出ています。また、先の大戦での日本の行いに「痛切な反省と心からのおわび」を繰り返し表明してきたことに関し「歴代内閣の立場は今後もゆるぎない」と表明したことについては、「適切だった(54%)」が「適切ではなかった(20%)」より多く、戦争に関わりのない世代の子どもたちに「謝罪を続ける宿命を負わせてはならない」という部分については、「共感する(63%)」が「共感しない(21%)」よりかなり多かったとしています。



## 日本だからこそ言えること

安全保障問題は国民に直結した問題ですが、日本は今、それ以外にも沖縄の基地問題や東京オリンピック・パラリンピックの準備、地震や豪雨など自然災害への対処など、数々の重要問題が山積しています。とりわけ経済対策は非常に重要です。大阪も含め、日本経済が発展しなければどうにもなりません。今後は消費税についての議論が高まるでしょうし、社会保障体制もしっかり整えなければなりません。財政問題でも「次の世代に借金を背負わせてはならない」のであり、それを可能にするには経済の安定が基本です。

とはいえ、今や経済は量の時代ではなく、質の時代に入っていると思います。つまり、経済成長が必要なのは当然ですが、個人の生活と社会の安定をどう保っていくかが重要なのです。近藤さんの基調講演は、この点についても示唆に富むものでした。日本人特有の精神性こそが、リベラル・デモクラシーを健全に機能させる鍵になるという問題提起です。個人の生活と社会の安定は、戦後さまざまな経験を経て平和国家を築いてきた日本だからこそ、そのモデルを世界に示すことができると思います。

## 世界で起きていること

アメリカは来年の大統領選挙を控え、世界は、オバマ大統領が最後に何にチャレンジするかに関心を寄せています。中国との関係や、クリミア問題でロシアとの関係が複雑化することへの懸念もあります。ロシアはプーチン大統領の権威主義が強まる一方、クリミア問題で欧米との関係も悪化しています。

中東に目を向ければ、IS(イスラム過激派組織)は話しても分かるような相手ではありませんし、ドイツなどでは中東難民

の受け入れが課題となっています。アジアではシンガポールの総選挙(9月11日)やミャンマーの総選挙(11月8日)があり、世界の関心事となっています。アジアの国々も国民の声を聞かなければ国が治まらない時代になってきたということです。

中国では9月11日現在の株価(上海総合指数)が、6月に比べて40%も急落しています。中国共産党の独裁による社会主義市場経済を20年続けてきた結果、官僚による汚職が蔓延し、政府がその一掃に乗り出したことで中国経済のもともとの矛盾が露呈してきたのです。また、現在の習近平体制は自らの権力と権威を国内外に誇示するために派手な軍事パレード(中国人民抗日戦争および世界反ファシスト戦争勝利70周年記念軍事パレード：9月3日)を行いました。しかし、1945年に中華人民共和国は存在せず、抗日戦争を戦った主体は台湾に行ってしまった国民党であることを、多くの中国の国民は知っています。権力の正統性は、国民の豊かで平和な生活を確保し、人々の信を得てこそ認められます。シンガポールやミャンマーのように、アジアの国々は国民の意見を聞いて、国を治めるようになってきているのです。中国政府はそれができないために、大言壮語を振りかざしているように見えます。

以上のことをふまえ、パネルディスカッションに移りたいと思います。

### 国分良成氏

1953年東京都生まれ。1981年慶応義塾大学大学院法学研究科博士課程修了。2007年～2011年まで同大学法学部長兼大学院法学研究科委員長。この間、ハーバード大学や北京大学などに客員研究員として留学。2012年4月より防衛学校校長。



# 希望の世界へ ～国際相互理解と文化交流～

パネリスト ▶ 近藤 誠一氏 (近藤文化・外交研究所代表、前文化庁長官)      コーディネーター ▶ 国分良成氏 (防衛大学校長)  
 角 和夫氏 (阪急電鉄会長、関西経済連合会副会長)  
 根本かおる氏 (国際連合 広報センター所長)  
 桂 文枝氏 (落語家、上方落語協会会長) ※session 2より参加

## session 1 日本・関西はどうしていきべきか

### 文化交流や相互理解で世界平和に貢献

**国分** パネルディスカッション・第1セッションでは、本日の基調講演などをふまえて、世界、日本、関西・大阪はどういう状況にあり、我々はどんな貢献ができるのかを議論したいと思います。まずは根本さん、続いて角さんにご発言をお願いします。

**根本** 私は神戸市出身ですので、関西・大阪の文化力を考えるこの会議に参加させていただくことを嬉しく思います。落語も大好きで、後ほど桂文枝さんがとなりに座られると聞いて、テンションが上がっています。さて、今年は日本の戦後70周年であり、国連も創設70周年を迎えました。今年8月、東京、広島、長崎において、国連職員の合唱団「United Nations Singers」による国連創設70周年記念と被爆70周年祈念のコンサートを開催しました。その際は関西・大阪21世紀協会にもご支援いただき、平和の祈りのハーモニーを紡ぐことができました。私が勤務する国際連合広報センターは、日本の皆さんに国連について知ってもらうための情報発信を行ったり、日本の方々が国連に望んでいることを事務局に報告し、より深く関わっていく環境づくりをミッションとしています。国連の中で教育・科学・文化を通じて平和を推進している専門機関はユネスコです。ユネスコ憲章の前文に「戦争は人の心の中で生まれるものだから、人の心の中に平和の砦(defences of peace)を築かなければならない」とあります。先ほどは国分先生から、他者の思いが分かる感性が必要だというお話があ

りました。日本人はそれにとっても長けていると私は感じています。そういう素質を国連の場などでどんどん発揮してほしい。9月25日からニューヨークで160以上の国の首脳が集まり、「持続可能な開発目標」を採択するためのサミットが開かれます。日本では、国民皆保険の考え方によって、全ての国民が大変高レベルな医療を受けることができます。サミットでは、持続可能な開発目標の中に保健衛生がしっかりと謳われることになっています。とくに、日本の保健衛生制度の良いところを、途上国にも学び取ってほしいと強く思っています。

**角** 関西の景気は今一つ良くないといわれています。東京一極集中の問題もありますが、関西にとってそれ以上に大きな要因は、生産拠点を海外にシフトさせたことでしょう。最近では、シャープが堺で、パナソニックが尼崎で、それぞれ大規模な設備投資をしましたが、残念ながらうまくいかない結果に終わりました。その最大の原因は、投資決定後、行き過ぎた円高が続いたことによる家電業界の国際競争力の低下です。リーマンショック後、前政権が金融政策に対して有効な手を打たなかったため、そういう結果が生まれたと思います。一方、為替が適正水準になり、これまでインバウンド(訪日する外国人)は700～800万人でしたが、2014年は1,300万人、2015年は1,800万人に達するといわれています。円安やビザ発給要件の緩和による影響もありますが、関西にインバウンドが急増した理由の一つは、LCC(格安航空会社)の参入が大きいと思います。例えば東アジアから日本へ来る際、関西国際空港と成田国際空港では所要時間が約1時間違います。窮屈な座席で1時間という時間差は大きいのですから、全国に比べて関西へのインバウンドが大きく伸びています。さらに、関西広域連合ができたことも追い風となっています。私は、LCC効果をさらに拡大させるために、関西広域連合と関西経済界が一緒になって広域観光ルートをつくり、関西の魅力をもっと発信したいと思っています。鉄道では2016年4月にJR西日本と関西の大手私鉄、京都・大阪・神戸の3地下鉄が全て1枚のカードで乗れる「関西ワンパス」を発売予定です。そうした取り組みにもご期待いただければと思います。





近藤誠一氏



角和夫氏



根本かおる氏



桂文枝氏



国分良成氏

**国分** 根本さんからは日本人が世界に出て行ってグローバルな活動をする一例として国連のお話を、角さんからは世界の力を日本、関西・大阪に引き込み、どのようにして景気高揚につなげるかというお話を伺いました。近藤さんはどうお考えですか。

**近藤** 根本さんが紹介されたユネスコ憲章に、なぜ「人の心の中に平和の砦を築く」という文言が盛り込まれたのでしょうか。終戦直後に国連ができたとき、安保理が安全を確保するため、侵略者は国連全体で懲らしめようという制度をつくりました。これは形式的には平和を保てるように見えますが、実はそれでは不十分です。そもそも戦争を起こしたくない、起こすと損だという気持ちを先に植え付ける必要があります。ユネスコの創設者はそれを承知していたからこそ、ユネスコを創設したのだと思います。理想論かもしれませんが「平和の砦」というのは戦争ではなく、協力を進める仕組みです。異なる文化や教育がぶつかると、双方にとってプラスになる。そういう恒久的な協力関係をつくれれば、その過程で否応なしに良心や善性などが前面に出てくるでしょう。ですから侵略者を罰する安全保障理事会とは別に、否が応でも平和の方向に協力しなければならない体制づくりを目指したのです。そして、実際にどういう仕組みをつくるかは、日本としてどんどん提案していくべきでしょう。文化だけではなく、防災や環境会議などを開き、平和に向かわざるを得ないような仕組みづくりのイニシアティブをとるべきだと思います。素晴らしい文化を持ち、その文化に誇りを持っていれば、こうした協力を前向きになるでしょう。そして、この国を守りたいという気持ちが湧き、万一紛争になっても、それが実際の軍事行動や経済行動にも反映します。文化への自信が、あらゆる時に力になると思います。

## 人間力を磨く

**国分** 防衛大学校では近藤さんや緒方貞子さん(元国連難民高等弁務官)など、各界の方に講演をお願いしています。緒方さんからは「私たちは武器も持たず、防弾チョッキ一つで自衛隊も行かないようなところに行ってるのですから」と学生たちを叱咤激励されました。こういう話を伺って感じるのは、自分

はどういう目的のために生きているのかを考えると、公、国、世界と結び付けていく感性が必要だということです。そして、この人について行きたいと思われるような人間力は、教養すなわち文化力によって培われるものであり、それによって国のため、人のために働くというミッション感覚を醸成してほしいと願っています。

**根本** 私が国連難民高等弁務官事務所に入ったのは、緒方さんが組織のトップとして采配を振っていた1996年です。緒方さんはよく「Think globally, act locally」とおっしゃいました。世界規模で物事を考え、目の前のこと、それぞれの持ち場で行動をすることが大切だということです。国連での議論も、現場で行動している人の献身・貢献がなければ、机上の空論になってしまいます。この二つが結びついて初めて、物事が動いていくのではないかと思います。

**角** 阪急阪神東宝グループの創始者である小林一三は、教育・文化・安心の三つのキーワードでまちづくりをしてきたと思います。阪急沿線には多くの大学、教育機関があります。文化面では、宝塚歌劇と阪神タイガースという資産を持っています。宝塚歌劇が101年も続いているのは、やはり文化力で沿線を豊かにしたいという小林の強い情熱があったからでしょう。1913年に宝塚音楽学校の前身である教育施設をつくり、公演ごとにオーディションをするのではなく、音楽学校で養成した人たちが演じ、演出・音楽・衣装なども全て自前で作品をつくってきたからこそ、今日まで続いてきたと思います。

## 6割が女性

**国分** 日本は、民間の人材を生かし切れていないという問題もあると思います。根本さんは、人材の発掘・登用についてどうお考えですか。

**根本** 国連と世界の教育機関とのパートナーシップで、国連に託された課題や活動に学生たちが関わるという、国連アカデミックインパクトというプロジェクトがあります。国連・国際機関で働くことも視野に入れたプログラムを持ち、世界1,000以上の大学、日本からもおよそ40の大学が参加しています。



また、現在、日本人の国連機関職員は約800名いますが、その6割が女性です。日本は他の国と男女比が逆です。国連はあらゆるレベルの職員で、男女比を2030年までに同率にしたいと考えています。ワークライフバランスは、ここでは当たり前のことです。ライフなしにワークはなく、ワークなしにライフはありません。育児休暇を取る男性職員や、親の介護で長期休暇をとる人もたくさんいます。さまざまな意味での多様性を認め、同性婚や同性のパートナーなどに対しても寛容です。そういう組織だからこそ、文化や宗教の異なる193もの出身国の人たちが、一緒に働いているのでしょう。

**近藤** 相手を重んじ、ある程度自己を抑えることができる日本人の精神性・国民性は、世界中で好感を持たれています。ODA(政府開発援助)などを通してじわじわと世界に広がっていったからでしょう。かつてイラク戦争が始まった後、3人の日本人がアルカイダに誘拐された事件がありました。そのときの犯行声明文の1行目に書かれていたのは、「我々は日本人を尊敬している。しかしあなた方は自衛隊を派遣して、それを裏切った」というものでした。テロリストの犯行声明で、いきなり

「尊敬している」というのは前代未聞です。私は、日本人の良い国民性についての認識をもっと伸ばしていくことで、世界に日本人の良さがより理解され、日本ファンが増えていくと思います。そのためにも、関西の企業は採用時に、留学や海外ボランティア経験を積んでいることが有利な条件になるよう、発進力のあるグローバルな人材が育つきっかけをつくってほしいと思います。

**国分** 宝塚歌劇団は台湾と交流をされているとお聞きしました。

**角** 東日本大震災では台湾がいち早く多額の義援金を日本に届けてくれました。これまで、宝塚の海外公演は、政府の要請などを受けて文化交流事業として実施するケースが多かったのですが、台湾公演では自らの主催事業として行っており、2年前の第1回公演では15,000席が、今年は20,000席が即日完売しました。さらには台湾の「中華民国三三企業交流会(三三会)」という経団連のような組織の方々に歌劇の良さを認めてもらい、スポンサーになっていただいています。台湾の親日感情は非常にありがたく、この関係を関西に広げていきたいと思っています。

## session 2

# 関西からの提案 ～私たちにできること～

## 文化を発信するために「呼び込む」

**国分** 第2セッションからは、桂文枝さんに加わっていただき、関西文化の発展のために具体的にどうすればいいのかを考えていきたいと思っています。

**文枝** 先般、関西・大阪21世紀協会の「アーツサポート関西(ASK)」を通じて、アートコーポレーション株式会社の寺田千代乃社長から、上方落語協会に500万円の寄付をいただきました。とてもありがたいことです。その寄付金で今年6月、天満天神繁昌亭で「上方落語若手噺家グランプリ」を開催しました。20人の若い落語家から予選を勝ち抜いた9人が本選で芸を競いました。本選の審査員は在阪のテレビ・ラジオ局7社のプロデューサー達でした。このように我々も一生懸命、次の世代を育てております。大阪の伝統芸能の継承というと、まず文楽が上げられます。人形遣いでも「足10年、左(手)15年」という辛抱のいる芸で、本当にみんなで支援していかなければなりません。とはいえ文楽だけではなく、落語や漫才、浪曲、講談といった上方の芸能文化全般で、次代を担う人たちの育成が課題となっています。

**国分** 文化によるまちおこしの例として、西宮市の兵庫県立芸術文化センターが成功しています。阪急阪神ホールディングスが深く関わっていますね。

**角** 阪神・淡路大震災の復興のシンボルとして兵庫県が2005年に開設しました。それまで関西では、本格的なオペラが上演できるのは滋賀県のびわ湖ホールだけでした。兵庫県立芸術文化センターの音楽監督・佐渡裕氏のご尽力もあり、

多くのお客様にご来場いただいています。私たちのグループでは、安い条件で兵庫県に土地を提供していますが、センターができたことで西宮市のまちの「格」が上がりました。隣接する阪急西宮ガーデンズや建て替えた阪急百貨店うめだ本店においても、単に商業施設をつくるのではなく、私たちは快適な時間を過ごせることを重視しています。空間を潤沢に使い文化も発信していく百貨店という形で、まちの活性化に貢献していきたいと考えています。

**近藤** 日本の文化や精神性の素晴らしさを理解してもらうには、海外公演も大事ですが、一番効果があるのは外国の若い人やアーティストに半年ぐらい日本に滞在してもらうことです。日本の自然やまち、日々の生活での人を思いやる言葉や行為、素晴らしい価値観などを肌で感じてもらう。文化の発信とは、実は呼び込むことでもあります。「アーティスト・イン・レジデンス(Artist in Residence=AIR)」という、国内外からアーティストを一定期間招聘し、滞在中の活動を支援する事業があります。宿泊施設とアトリエが確保できれば、自由にのびのびと創作活動ができます。そんな中で日本の自然に感動し、アーティスト同士がインスピレーションを交換する。そうすると必ず日本が好きになって帰国していきます。関西の素晴らしい伝統文化、現代文化を肌で感じてもらうためにも、このAIRを増やしていくことが大切です。

## 大阪城や食博を活かし文化の祭典を

**文枝** 今、心齋橋界隈には海外の人が多いですね。長堀通

にはびっしりと観光バスが停まっています。食べものもおいしい、人間の面白さも大阪の魅力です。例えば東京のお寿司屋さんは粋ではありますが、「いらっしやいませ。何にしましょう?」というやり取りで、店もお客さんもよそ行きです。一方、大阪では天満のお寿司屋さんに入って「いらっしやいませ。なにしまひよ」と聞かれて「何握ってもらおかな」と答えると、「手えでも握りまひよか」と言われました。今、チェーン店ではない日本の昔ながらの喫茶店が見直されているそうです。私もそういう喫茶店でお好みのブレンドコーヒーを飲みます。朝、カウンターには80歳を越えた常連のご婦人方が並んで座り、モーニングサービスを注文されています。その店では彼女たちのことをなんと「モーニング娘」と呼んでいます。お年寄りも若い者も一緒になって、いろんな議論や談笑をするまちの喫茶店が、再び文化の発信地になるのではないかと思います。日本は、人・もの・金・情報が東京を中心に回っています。東京オリンピック・パラリンピックはスポーツの祭典ですが、大阪は文化ここにありということを示さなければいけません。例えば、大阪城を活用し、舞台芸術や文化の祭典をやったら世界的にも話題になります。

**角** 文枝さんがおっしゃる大阪人の人間力は、データで裏付けられています。アメリカの旅行関係の雑誌で、京都が2年連続で世界一の観光都市に選ばれました。一方、海外から日本に来た人がホスピタリティや人の温かさに関して、全都道府県の中で一番好感が持てるかと答えたのが大阪府です。また、和食がユネスコの無形文化遺産に選ばれましたが、大阪の食を多くの方に味わっていただくため、4年に1回、民間が主体となり「食博覧会」を開催しています。次回は2017年です。前は約70万人が来場しており、2年後も大成功に導くように頑張りたいと思います。

**根本** 私は、電気も水道も通じていない僻地の難民支援に長く携って来ました。そこで現地の人に和食を振る舞って人気者になりました。卵とツナの缶詰、インスタントのおすしの素を使えば、「なんちゃってちらし寿司」ができます。和食は海外で大人気です。冷凍のタコを使ってみんなでわいわい言いながらタコ焼きをつくると、対立している政治グループの人たちも仲良くなります。食の力はとても大きい。それに加えて、笑いの力は関西・大阪の真骨頂です。私は落語の大ファンで、東京の寄席はもちろん、天満天神繁昌亭にも行きます。落語は日本の誇る文化です。実は国連機関の中でも、奥地に入って難民支援や食糧援助をしている日本人は、私も含めて関西出身者が多い。国際社会の中ではバカバカしいがみ合いや意地の張り合いが多く、いちいち真面目に考えてしまうと身が持ちません。そんなとき、「笑ってやるしかない」という関西人のバイタリティは、本当にすごいと実感しました。

**近藤** 日本の古典芸能は日本の若い人もすぐには受け入れられず、敬遠しがちです。その真髄を外国人にわかってもらうには、作品を選び効果的に見せることです。そうすれば日本の



古典芸能は世界に必ずや受け入れられると思います。例えば狂言は短くて比較的わかりやすい。私の好きな狂言の一つが「宗論」。2人のお坊さんが旅をしている。ところが互いの宗派が異なることが分かって口論になる。だんだんエスカレートし、ついには自分のお経を唱えて踊りまくる。ところがふと気づくとお互いに相手の宗派のお経を唱えていた。そして、「なんだ、そうか。所詮我々は仏に仕える身ではないか」と言って仲直りするという話です。宗教対立の激しい世界にあって、日本人は客観的に自分を見る能力があり、素晴らしいと思ってもらえるでしょう。

## 万博基金助成などで支援の輪を拡大

**国分** 最後に、関西・大阪21世紀協会に対して、ご提案をいただきたいと思います。

**根本** 私が学生時代にやっておけばよかったと思うことは、日本に来ている留学生たちとの交流です。彼らこそ生きた国際社会をまといながら暮らしています。なぜ私は彼らと触れ合い、意見を闘わせなかったのかと今にして思います。関西には多くの大学があり多くの留学生がいます。学生同士の交流を進めるプロジェクトを支援すると、あらゆる面で実りが大きいのではないかと思います。外交は国同士が基本ですが、相手の国の一般の人たちと親しくなれば、仮に相手国が面白くないことをしても、自分が知っている人たちのことを思い出せば、ややもすると猛々しくなってしまう気持ちも抑えられます。関西・大阪21世紀協会には、ぜひ、そういう若い人たちを支援していただきたいと思います。

**角** 経済の裏打ちがなければ、伝統的な文化や技能を守っていけない現実があります。宝塚歌劇は長らく赤字経営でしたが、なんとかもちこたえて利益が出せる体質に改善しました。そうすることで、これからもずっと続けていくことができるのです。関西・大阪21世紀協会は「万博記念基金事業」や「アーツサポート関西」など、さまざまな文化支援の活動を行ってられます。こうした活動は多くの方々の寄付に負う部分が多いので、より多くのご賛同を得られるよう頑張りたいと思います。



**近藤** 東京ディズニーランドは確かに東京観光の大きな魅力の一つですが、大阪には「匠(たくみ)ランド」をつくってほしいと思います。そこは陶芸、漆芸、染色などの工芸や、大工、左官、畳職人の技など日本の匠が揃い、江戸時代の大坂のまちが再現され、着物で歩くと三味線の音が聞こえてくるような場所です。外国人や若い人たちを引き付ける大きな魅力になるでしょう。伝統工芸のマーケットも広がり、後継者の育成に役立つと思います。初期投資は必要ですが、そこは角さんたちに頑張ってもらって資金を集め、関西・大阪21世紀協会が主体となってつくっていただければと思います。

**文枝** 先ほど、国連にも関西の人が多くおられることを伺いました。大阪の人は本当にユニークで、アイデアマンで、面白いのですが、残念なのは、お笑いの世界でもたいてい東京へ行ってしまうことです。今、大阪のテレビ局は残念ながらゴールデンタイムに放送する番組をほとんど制作していません。朝か夕方、深夜の番組が中心です。大阪には優秀な才能がいっぱいあるのに、東京へと離れていくことを私は一番情けなく思います。そこを何とか大阪にとどめることができれば、もっと大阪は元気になれると思っています。

**国分** 大阪の中之島は私にとって聖地で、この会場のすぐ近くに偉人・福沢諭吉先生の生誕地があります。福沢諭吉

は、「一身の独立なくして国の独立なし」と考えました。一人の人間の意識が国の総和になる。個人の独立がなければ国の独立はあり得ないと。この発想こそが今求められていると思います。文化力の原点はどこにあるのでしょうか。東京は政治と経済で忙しく、それ以外を考える余裕がありません。新たな価値や発想をつくり出す、あるいは笑いや食という感性を育む役割が、関西・大阪にあると思います。本日はありがとうございました。

### 角 和夫氏

1949年兵庫県生まれ。早稲田大学政治経済学部卒。1973年阪急電鉄株式会社に入社。2006年阪急阪神ホールディングス株式会社代表取締役社長(現職)。2014年より現職。宝塚歌劇団向けに自身が作詞・作曲した楽曲の提供を行ったこともある。

### 根本 かおる氏

兵庫県生まれ。東京大学法学部卒。1996年から2011年末までUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)にて難民支援活動に従事。ジュネーブ本部では政策立案、民間部広報官、国連UNHCR協会事務局長も歴任。2013年8月より現職。

### 桂 文枝氏

1943年大阪府生まれ。関西大学在学中に桂小文枝(故・五代目桂文枝)に入門。国内外で独演会や講演会を開催するかたわら、後進の育成・文化活動にも力を注ぐ。2006年紫綬褒章受章、芸術選奨文部科学大臣賞受章。2015年旭日小綬章受章等。

本会議での提言は、  
関西・大阪文化力会議2015「中之島宣言」として、広く市民や行政に呼びかけていきます。

## 関西・大阪文化力会議2015 中之島宣言

我はこれ 水の神 ミズハノメノ大神  
此度の取り決め 汝らに代わって読み上げ申すべし 心を鎮めてよう聞け

世は21世紀なれど 未だ人類は 戦争や破壊 難民や貧困に苦しんでおる

今こそ 古来日本人が育みし「伝統精神」「経世済民」の心を蘇らせ「世界平和」「道徳の再構築」に貢献する事 これ皆日本の務めなり

さすれば 我が国最初の万博開催地 大阪が先立ち「文化交流」「相互理解」を深め 人類の進歩と調和の為 万博基金の助成を末永く続け「アーツサポート関西」支援の輪を拡大すべし

2017年「食博」にて世界遺産「和食文化」を国々に伝え また「大阪城」を舞台に世界のさまざまな芸術家を招き 多彩な文化催事を執り行い 希望に満ちた「五輪文化プログラム」として描くべし

文化は地域創造を高めるものなり

浪速の地より事始め 萬民ともに力をつくすべし  
浪速の地より事始め 萬民ともに力をつくすべし

平成27年9月11日

関西・大阪文化力会議2015



奏上 小笠原 匡さん  
能楽 和泉流狂言方・  
(重要無形文化財総合指定保持者)



笙 掛下久生さん



石笛 安田典幸さん



太鼓 服藤菜美さん



日本万国博覧会  
記念基金

# 万博記念基金助成団体が 助成事業の成果を披露

当協会は、2014年に日本万国博覧会記念基金事業(1971年設立)を引き継ぎ、国際相互理解を促進する活動をはじめ、さまざまな文化活動を支援している。今回の文化力会議では、そうした助成先の団体も参加し、オープニングや会議終了後の交流会で助成事業の成果を披露。団体の紹介コーナーも設置し、日頃の活動のアピールや来場者との交流を促した。

## オープニング

### 一般社団法人 大阪コレgium・ムジクム (主宰・指揮：当間修一氏)

1975年に創設し、今年40周年。大阪を基盤に全国的に活動。5回にわたるドイツ・ヨーロッパ公演では各新聞評で絶賛された。1998年文化庁芸術音楽部門優秀賞、2011年大阪文化祭賞グランプリなど受賞。2曲の合唱を披露したほか、同団体所属の大阪ハイソニック・シュッツ室内合唱団が『われら愛す』を歌った。



『われら愛す』は、1953年にサンフランシスコ講和条約発効1周年を迎えたのを機に、新たな国民歌を作ろうと壽屋(現サントリーホールディングス)が新聞広告で公募したもの。全国から5万通をこえる歌詞と3000以上の曲が寄せられ、審査委員の西条八十や三好達治、サトウハチロー、山田耕筰らが選考した。憲法の心と美しく平和な日本を愛したいという願いを美しい調べにのせ、今に伝えている。

#### われら愛す

作詞：芳賀秀太郎  
作曲：西崎嘉太郎

われら愛す  
胸せまる あつきおもいに  
この国を われら愛す  
しらぬ火、筑紫のうみべ  
みずかかると信濃のやまべ  
われら愛す  
涙あふれて  
この国の空の青さよ  
この国の水の青さよ  
(一番のみ抜粋)

## 交流会

### 和歌山市民オペラ協会

1964年に前身の和歌山音楽研究会が設立、1997年に現在の名称に改称。親しみのある題材でオペラを創作・上演し、和歌山県の文化振興や地域の福祉・教育・文化活動の核となる人材育成を目指している。オペラ『夕鶴』の1場面を披露した。



### 一般社団法人KIO(キオ)

1971年創立。大阪を拠点に創作児童演劇を企画・上演。全国の小中高校での公演活動など、年間公演回数は100日を超え、国際交流にも積極的に取り組む。カナダの劇団「コープス」のパフォーマンス『飛行隊』を日本人キャストで初披露した。



### 交流会でのブース紹介

NPO法人ミュージック・シェアリング、NPO法人関西フィルハーモニー管弦楽団、(公財)日本センチュリー交響楽団、劇団そとばこまち、大阪アジア映画祭、国立民族学博物館、(公財)大阪日本民芸館、(一社)大阪コレgium・ムジクム、和歌山市民オペラ協会、(一社)KIO

